

仏教と平和

ノーランニット・セータブット

蝶名林 亮 訳

1 なぜ、いまだにこれほど多くの紛争があるのか

「平和」という言葉について考える時、「その言葉とは裏腹に」私たちはしばしば一種の不安を覚えます。この不安は、「世界各地で」拡大を続ける紛争の現実からくるものです。

グローバル化の時代である今日、科学技術の発展により私たちは「世界各地の人々と」簡単にコミュニケーションをとることができ、容易に知り合うこ

とができます。そのような時代であるにもかかわらず、なぜ、いまだに戦争へと至る紛争がこれほど多くあるのでしょうか。今こそ平和への探求を始める必要があります。

最も奇妙なことは、科学技術は急速に発達しているにもかかわらず、それが紛争を減少させることに利用されることはなく、むしろ武器の改良、ミサイルの開発、ドローン兵器や核兵器の開発を可能にし、紛争によってもたらされる破壊のレベルを高めることに寄与してしまっている点です。

世界情勢を注視している方々は、シリアの現状についていろいろとお聞きになっていることでしょう。シリアでは国内の紛争が全面的な内戦に発展していきました。さらに、内戦というレベルにとどまらず、外国軍の介入という国際的な紛争に発展しました。アフガニスタンでもいまだに紛争が続いており、ここでも世界の超大国が軍隊を派遣する事態になりました。一方で、欧州ではウクライナにおいて反政府軍と政府、そしてロシア軍との戦闘が行われました。これら以外にも数えきれないテロが世界中で起きています。

現代の戦争は、考え方、信念の相違が原因となつて、人々が殺し合うので、通常の安全保障の基準を超えてしまうのです。そして、その中で行われる戦闘行為に、直接の当事者ではない無辜の民衆が巻き込まれていきます。

世界では他にも様々な種類の争いがあります。国内紛争は、アフリカやアジアの各地で見られます。この種の争いは、今のところまだ制御されていますが、やがて戦争へと発展する可能性を秘めており、これらも

また平和へのリアルな脅威であると考えねばなりません。

正式に戦争として宣言されたものも、そうでないものも、戦争へと拡大してしまう紛争は国と国の間の政治上の問題であり、最終的に多大な被害をもたらします。多くの人々が傷つき、殺されます。家や家族を失った人々は、国外に脱出することを試みます。彼らは死やケガのリスクをおかして海路などで国外に脱出します。海上での犠牲も数多くあります。たとえ難民として国外に脱出できても、さらなる困難が待ち構えています。難民たちは多くの国々でしばしば、問題を引き起こす因子として認識され、それにより法的な拘束を受ける場合があります。難民たちが置かれた困難な状況は非常に嘆かわしいものです。

以上で述べたことは、現在起こっている様々な紛争のほんの一部分でしかありません。全ての紛争について話をするということになると膨大な時間になってしまいます。しかしながら、国際政治において、国際的な紛争というものはそれほど新しい現象ではありません

ん。世界史を見渡してみると、二十世紀初頭には一つの国際紛争が第一次世界大戦へと発展していったという事例があります。この国際紛争は各国の利権争いから始まり、それぞれの同盟国を巻き込んでいったのです。戦争には勝者と敗者がいます。敗戦国は、国富と人命の甚大な損失をこうむるだけでなく、戦勝国に対する多額の賠償金も支払わねばなりません。戦勝国も、勝つまでに莫大な犠牲を払わなければなりません。

第一次大戦の二十年後に、再び大戦が勃発しました。第一次大戦をもたらした国家主義が再び戦争の大きな原因になりました。しかも、規模はより拡大したのです。欧州で始まった戦争は、結局、アメリカやアジアも巻き込んでいきました。戦死者の規模は前大戦よりもさらに破局的なものになりました。

第二次大戦が終結したのもつかのま、すぐに新たな紛争が始まりました。今度は、イデオロギーによる紛争でした。もともと同じ国であったものが、イデオロギーの違いから分断されるという事態にもなりました。

〔超大国が背後に控えた〕最前線で、共産主義を擁護する国々とそれを否定する国々が争いました。この思想の争いは、世界各地で戦闘と殺戮を引き起こし続けました。東ドイツは共産国になり、西ドイツはそれを拒絶しました。アジアでは北朝鮮と韓国、北ベトナムと南ベトナムが、同じように分断されました。

今から二十五年ほど前の一九九一年には、ソビエト連邦と東ヨーロッパの共産圏が崩壊しました。人々は戦争に疲れ、平和を欲しました。イデオロギーの争いもたらした冷戦はついに終結し、永続的な平和へと向かっていくはずでした。

ところが、それから二十五年後の現在、世界ではいまだに多くの国際的な紛争が噴出していきます。殺戮が止むことはありませんでした。現在、信仰の名のもとに死をとって他者を攻撃する人々を私たちは目撃しています。これは、伝統的な紛争においては見られなかったような、国境を超えた紛争現象です。異なる信仰をもっていけば、たとえ相手が同じ国の人であっても、戦闘が行われ、殺害することもあります。テロリズム

とは、現在われわれが直面しているこのようなタイプの紛争です。

ここまでお話ししたことは、われわれ世界の民衆が向き合わねばならない世界的問題群の一端です。

先ほどお話しした三つの事例（アフガニスタン、シリア、ウクライナの事例）について、これらの紛争地域で人々に刻まれたトラウマのことをご存知の方もおられると思います。これらの事例がどれほど拡大していったか、この機会を使ってもう少し詳しくお話をしたいと思えます。

二〇〇一年に始まったアフガニスタン紛争は現在も続いており、三つの事例の中で最も長期化しているのです。すでに十五年以上の時が経過しており、現在でも、どのように終結を迎えることができるのか、私たちは明確なビジョンをもち合わせていません。ある報告によると、「二〇〇一年の紛争開始から約十万四千人が亡くなった。そのうちの三万一千人以上が民間人〔非戦闘員〕であった。これに加えて、これまでに四万一千人の民間人が負傷した」とされています。⁽¹⁾

二つ目の事例は五年前に始まったシリアでの戦争です。当初はバッシュアール・アルリアサド大統領への抗議というかたちで始まりましたが、すぐに全面的な内戦へと発展していき、三十万人以上の死者を出し、大⁽²⁾国の軍事介入を招く結果になりました。

この戦争が引き起こした大きな問題は、シリアからの大量の難民です。「約千百万人のシリア人が国外に脱出した。その内、約四百八十万人が隣国に難民として逃れざるをえなかった。シリア国内においては六百三十万人以上が住む家を失い、千三百五十万人が今なお人道的援助を必要としている」⁽³⁾とされています。

三つ目の事例は欧州のウクライナで起こった二〇一四年の紛争で、ここでも多くの犠牲者が出ています。「国連人道問題調整事務所（OCHA）」によると、二〇一四年四月六日に始まった（ウクライナ東部の）ドンバスでの戦闘でこれまでに九千七百五十八人の死者が記録されている」⁽⁴⁾といえます。

ウクライナの事例は、紛争に何の関係もない外国人を巻き込むかたちで、さらに事態が悪化していきまし

た。多くの皆さんはマレーシア航空MH17便がウクライナ上空で墜落した二〇一四年七月十七日の事件を覚えておられるでしょう。この民間航空機はウクライナ紛争の当事者であったあるグループによって撃ち落とされたとされています。

ウクライナ紛争における犠牲者の数は、現在のところ、次のように報告されています。「三百四人の外国籍の一般人が死亡した。マレーシア航空17便の事件で乗客と乗務員を合わせて二百九十八人が死亡した。他に、四人以上のロシア人ジャーナリスト、国境付近での戦闘でロシアの民間人一人が死亡した。またリトアニアの外交官一人が死亡した」〔数字については別説もある〕。

これらの紛争と戦争は世界各国の首脳にとって大きな課題となっています。これらは人間によって作り出された危機であり、私たちの「文明人としての」生き方を破壊するものです。これらはそれ自身がカタストロフィです。これらに対処するためには、われわれは、それが容易な仕事ではないことを理解しなければなりません。とはいえ、アフガニスタンの事例では十五年、

シリアの事例では五年も戦闘状態が続いているのです。こんなことが許されるべきではありません。紛争を直ちに停止し、さらなる拡大を防がねばなりません。ウクライナの事例で明らかのように、短期間の戦闘であっても深刻な結果をもたらすからです。では、私たちはどのように平和を創出できるのでしょうか。

2 「四諦」と「王者の十徳」

仏教徒である私は、しばしば教主・ブツダの教えのことを考えます。その一つに「四諦」という考えがあります。四諦とは以下の四つの真理をいいます。

1. 苦諦 苦しみにについての真理
2. 集諦 苦しみの原因
3. 滅諦 苦しみを滅すること
4. 道諦 苦しみを滅する方法

私はこの仏教の教えを平和創出のために適用できると信じています。戦争のトラウマは「苦諦」として理

解することができます。ここから、苦の原因を探る「集諦」へと進むこととなります。苦を減する「滅諦」をもたらすためです。この過程を通してはじめて、苦を減する方法である「道諦」に達することができます。

戦争は人間によって作り出されたものです。どの紛争にも、指導者とその支持者からなる集団が双方にいます。私たちは、それぞれの状況において、紛争を生んでいるのは何なのかを見極めねばなりません。指導者は、戦争へと舵を切るのか、それともそれを回避するのか、最終的な決断を下します。それゆえに、まずは指導者について知ることが重要です。彼らが平和ではなく戦争を選んだとしたら、それはなぜなのか、理由を知る必要があります。さしあたって、次の二つの理由が考えられます。

(1) 利益…国際政治において、ある国の様々な政策の理由として「国益」が挙げられるのは周知の通りです。戦争も同様です。「資源への欲求」も国益のひとつであり、戦争の主要な原因となりえます。

(2) 感情…戦争はしばしば民族的・宗教的な緊張が重

なり合うことで起こったり、抑圧的な政府同士の関係がこじれて起こります。われわれの判断が感情によって曇らされると、何がより善いことなのか見えなくなってしまうのです。それが人間というものかもしれない。だからこそ、民衆の指導者になることは実に困難な仕事なのです。指導者は大きな責任をもち、また、たいていの場合、自分が率いる人々に対して語る義務があります。戦争への決断が一人の人物の双肩にかかっている場合、その人物は人々のために正しい決断を下さねばなりません。

この点に関して、仏教の知見を生かせるもう一つの例として、為政者の資質を説いた「王者の十徳(トッサピット・ラーチャタム)」があります。⁽⁵⁾これは正しい支配者・為政者をもつべきとされる徳についての教えです。

一つ目は「布施(Dāna)」です。⁽⁶⁾為政者は与える人であるべきだということです。

二つ目は「持戒(Sīla)」です。為政者は悪しき行為を自制せねばなりません。

三つ目は「遍捨(Pariccaga)」です。為政者は大きな善

のために何かを捧げねばなりません。

四つ目は「正直 (Ajjava)」です。為政者は全ての政務・責務において正直に振る舞わねばなりません。

五つ目は「柔和 (Maddava)」です。為政者は謙虚でなければなりません。これは、弱さとは異なります。礼儀正しさや品のよい適切な態度が必要なのです。

六つ目は「熱心 (Tana)」です。為政者は為すべきことを為す勇気をもたねばならず、怠惰にならず、責務を日々たゆまず果たさねばなりません。

七つ目は「不怒 (Akkodha)」です。「柔和」の徳と同様に、為政者はすぐに感情的になるのではなく、常に冷静沈着でなければなりません。人々を受け入れ、慈悲を示さねばなりません。

八つ目は「不害 (Avihimsa)」です。為政者はどのような他者にも迷惑をかけるべきではないということです。

九つ目は「忍辱 (Khami)」です。正しい判断をするには、為政者は身体的・心理的な苦痛など不快なことに耐えねばなりません。

最後の徳は「不誤 (Avirodhana)」です。端的に、為政

者は不正なことをしてはならないということです。人は間違いをおかすものですが、為政者は常により高い倫理基準によって自らを律していかなければなりません。

これらの十徳を備えた為政者は、紛争の拡大を抑えるだけではなく、紛争そのものを回避することができるとして、たとえば、国内のある集団が紛争へ突き進もうとしていたとしても、指導者がそれを拒否すれば紛争を回避できます。また、一方の指導者が紛争を望んだとしても、もう一方の指導者が交渉によって課題を解決する用意があれば、紛争を回避できる可能性があります。つまり一人の優れた指導者がいれば、世界の情勢に大きな変化をもたらすことができるのです。

これに加えて、紛争の根源となった諸原因に取り組むことができれば、異なる集団間の溝を解消することができます。この方法によってのみ、私たちは「平和への確かな道」を踏み固め始められるのです。

〔 〕は邦訳に際しての補注

訳注

- (1) アフガニスタン紛争における犠牲者の数は、ブラウン大学ワトソン国際研究所が発表した統計による (<http://watson.brown.edu/costsofwar/costshuman/civilians/atgban> 【二〇一七年八月一七日に訳者がアクセス】)。
- (2) シリア紛争における犠牲者の数は、BBCの以下のページからの引用と思われる (<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-35806229> 【二〇一七年八月一七日に訳者がアクセス】)。国連は二〇一五年の時点で犠牲者は二十五万人以上と発表したが、その後、死者数は増え続けていると見られており、シリア政策研究センターは二〇一六年の時点で死者数は四十七万人以上と発表している (<https://www.theguardian.com/world/2016/feb/11/report-on-syria-conflict-finds-115-of-population-killed-or-injured> 【二〇一七年八月一七日に訳者がアクセス】)。
- (3) シリア難民の統計については、国際人道支援団体 Mercy Corps のウェブサイトの数字に依拠している (<https://www.mercycorps.org/articles/raq-jordan-lebanon-syria-turkey/quick-facts-what-you-need-know-about-syria-crisis> 【二〇一七年八月一七日に訳者がアクセス】)。
- (4) Mercy Corps のホームページには「国連によると九千四百七十人の死者が出たとされているが……多くの識者はこの数字は相当に控えめな数字であり、実際の数字はこれを上回るとしている」とある (<https://www.mercycorps.org/articles/ukraine/quick-facts-about-ukraine-crisis> 【二〇一七年八月一七日に訳者がアクセス】)。また、二〇一七年七月に発表された国連人権高等弁務官事務所 (OHCHR) の報告によると、これまでの戦闘による死者の数は十万人にのぼるといふ (<http://www.ohchr.org/Documents/Countries/UA/UAReport18th-EN.pdf> 【二〇一七年八月一七日に訳者がアクセス】)。
- (5) 原文ではタイのラーマ九世 (プーミポン前国王) が生前心がけていた指針として紹介されている (<http://thailand.prd.go.th/book2/king/dhamma.html>) を参照。【二〇一七年八月二十一日に訳者がアクセス】。王者の十徳は、*Dasavdha-rājadhama* と呼ばれ、種々の仏典で説かれている (*Tāṭaka*, v. 378 など)。また、タイの伝統的法体系で実定法秩序の頂点に位置した『タマサート法典』において、国王が守るべき最も重要な倫理規範とされている (下條芳明 2013 「タイ憲法政治の特色と国王概念——比較文明論的な視点を交えて——」『商経論叢』54 (1))。
- (6) 十徳の解説や訳語には、典拠によって若干の異同がある。本稿の日本語訳は、古山健一 (2016) 『Yod Chiangrai 王と Tapodātāma の建立』『駒澤大学佛教學部論集』第47号に従った。ただし、「王者の十徳」自体は、同論文では「十王法」と訳されている。

Norani Seburi / タイ王国・タマサート大学評議会
議長、世界仏教大学評議会議長。タイ王立協会フェ
ローなどの要職にある。また、タマサート大学学長、
世界仏教徒大学学長、タイ制憲議会議長などを歴任し
てきた。カナダのロイヤルローズ大学（2005年）、
創価大学（2016年）より名誉博士号を授与されて
いる。

（訳・ちようなばやし りよう／東洋哲学研究所研究員）